第　41　号

県中教研
特別支援教育部会だより

発 行 日　令和8年3月
発 行 所　富山市千歳町1－5－1
富山県中学校教育研究会
編集責任者　大村　　彩
題　　字　金山　泰仁　先生

自立活動を学ぶ意義を生徒自身が考えること

指導主事　佐々木　暁

研究主題「特別な支援を必要とする生徒の能力や可能性を伸ばし、自立と社会参加を推進する指導はどうあればよいか。－生徒一人一人の実態に応じ、興味・関心や意欲を高める学習過程の工夫－」の下、各地域で研究授業が実践されました。

研究大会で授業を参観させていただいた特別支援学級では、人前で話すことを苦手としている生徒が、「人前で緊張せずに話すことができるようになる。」という目当てをもち、自分の得意なところや課題と感じていることについて、ICTを活用して学級の仲間に発表している姿がありました。そして、授業の振り返りでは、「人前で話すことができてよかった。これからも人前で話せると思う。」と語った生徒に、教師が「先生もそう思う。自信をもって。」と笑顔で励ます場面があり、温かな関係を感じることができました。

『特別支援学校教育要領』『学習指導要領解説自立活動編』の具体的な指導内容キには、「自立活動を学ぶことの意味に自ら気付き、目的意識をもって、主体的に学習に取り組めるようにしていくことは、児童生徒の自立活動に対する学習に取り組む力を高め、将来の自立と社会参加を実現する又は果たす上で非常に重要である」とあります。先の研究大会の授業場面は、自立活動における学習の意味を生徒と教師が互いに共有できた瞬間だったのではないでしょうか。自分の困難を改善・克服したいという生徒の思いを大切にした実態把握を日々丁寧に行い、一人一人の教育的ニーズに応じて学習過程を工夫していくことの大切さを改めて実感しました。

今後も、特別支援教育部会の先生方には、各学校の中心となって生徒の自立と社会参加に向けた指導と支援を工夫し、各校の特別支援教育の推進にご尽力いただきたいと思います。

（西部教育事務所）

一人一人に応じた指導過程・評価の工夫

部長　大村　　彩

昨年度に引き続き、「特別な支援を必要とする生徒の能力や可能性を伸ばし、自立と社会参加を推進する指導はどうあればよいか」を主題とし、研究を進めてきました。

第69回研究大会では、東西両地区で工夫を凝らした実践が提案され、多くの成果を得ることができました。授業者をはじめ、運営に携わってくださった全ての方々のご尽力に深く感謝申し上げます。

東部地区では、事前に録画された授業の様子を視聴する形で発表が行われました。生成AIを用いた会話練習や、自分の成長を視覚的に捉えられるよう支援する「聞き上手チップ」の活用を通して、相手の気持ちを大切にした聞き方について学びを深める姿が見られました。

西部地区でも東部地区同様に、事前録画された授業の様子を視聴する形で発表が行われました。教員からの励ましやゲーム要素を取り入れたソーシャルスキルトレーニング等の支援を通して、生徒は自己肯定感を高め、学びを今後の生活に生かそうとする姿が見られました。

また、授業力向上アドバイザーとして富山大学教育学部教授であり、医師でもある宮一志先生をお迎えし、障害をもつ生徒の自立支援の在り方についてご講話をいただきました。生徒たちの成人期の生活を予想し、学校段階間の連携や就労に必要な能力等を教員が理解することの大切さについて、貴重なご示唆をいただきました。

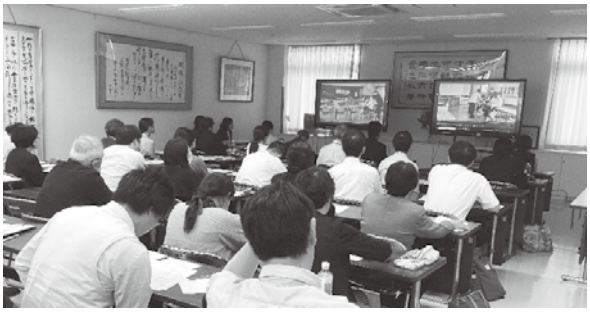
近年、特別な支援を必要とする生徒の数は増加傾向にあり、多様な障害の種類や状態等に応じた指導や支援の必要性が一層高まっています。今後も、生徒が前向きに活動できる指導過程の工夫、成就感や達成感を味わえるような評価の工夫を充実させていきたいと思います。

（高・芳野中）

第69回 富山県中学校教育課程研究大会

東部地区（朝日町立朝日中学校） 令和7年10月15日（水）

自閉症・情緒障害特別支援学級６名のうち、１学年男子１名、女子１名において、田中美津子教諭が自立活動「聞き上手になろう」の研究授業を行った。本時は、よい聞き方とよくない聞き方を教師が実演した動画視聴や、生成AIとの会話練習を通して、上手な話の聞き方を身に付けることをねらいとする内容であった。参加者は、事前に撮影された授業の様子を協議会場で視聴した。



授業では、信頼のおける教師の実演を見ることで、相手の気持ちを大切にした聞き方とはどのようなものかを考えることができた。また、聞き方の練習に生成AIを取り入れることで、生成AIの聞き方が生徒の模範となり、その後のロールプレイに生かしている場面がみられた。また、生徒同士が互いに相手を見る、頷く、表情、繰り返す、質問する、の５つの観点を「聞き上手チップ(ごほうびシールを台紙に貼り合う相互評価)」で評価する場面では、これまでの活動で学んだ聞くときのポイントを確認しながら対話を重ねており、主題について考えを深める生徒の姿が見られた。次時の様子も合わせて視聴することで、学習前後の変容を確認することができた。

部会協議①では、５～６人のグループで授業の様子を視聴して気付いたことや研究主題との関連について、現任校での取組を振り返りながら意見交換・情報共有を行った。効果的な生成AIの活用について学ぶことができたという声が多かった。本授業後の２回目に行われた授業の動画視聴では、生徒が台本を見ずに自然な感じで楽しそうに会話しており、生徒の大きな変容を確認することができた。一方で、少人数の特別支援学級で意見を交流することの難しさに言及する意見もあった。

部会協議②では、障害種別のグループに分かれて「自立と社会参加を推進する指導はどうあればよいか」をテーマに協議を行った。意見を全体で共有する中で、特性によって目指す進路が異なることを理解するとともに、目指す進路に関わらず社会に参加する上で必要なスキルとは何かを考えることが大切であるという意見が出た。

齋藤理指導主事（東部教育事務所）からは、次の助言をいただいた。

・相手の気持ちを大切にした聞き方について、交流級で実施したアンケート結果を提示し、多くの人の捉え方を知ることができるように場を設けたことは、社会に出て人と関わる力を育てていく上で効果的だった。
・一人一人の困難さを基にした授業構想や生徒にとって必要感のある目標設定、「聞き上手チップ」の活用により、生徒は自分の成長を感じることができた。自・情級に在籍する生徒の中には自己評価が難しいこともある。自分の成長が視覚的に分かるようにするなどの支援を工夫することで、自己評価することに前向きになり、自己調整しながら学習を更に進めることが見込まれる。
・教具として生成AIを活用し、会話の練習相手としたことで、人との会話に抵抗のある生徒が安心して活動できていた。実際のコミュニケーション場面に生かすことができるよう、スモールステップで学習計画を立てることが大切である。
・一般的には好ましくないとされる聞き方をよいと考える生徒の感じ方を大切にする担任の姿勢がみられた。なぜその聞き方が好ましいと感じたかを問い返すことで、価値観がより明確になったと考えられる。聞き方のスキルを身に付けることも大切だが、生徒が相手の気持ちを大切にした聞き方とはどのようなものかを問い続けられるようにすることが期待される。

森田　滉平（中・雄山中）

第69回 富山県中学校教育課程研究大会

西部地区（射水市立大門中学校）　令和7年10月15日（水）

研究授業では、自閉症・情緒障害特別支援学級（２年生７名）で嶋明子教諭による自立活動が行われた。生徒の活動を妨げないように、事前にカメラ３台を使って録画したものを、当日、参加者が協議会場で視聴した。

単元名「人とつながろう」相手を意識して、自分の思いを伝えよう

ソーシャルチェックを基に、コミュニケーションにおける自分の課題を確認し、ゲーム要素を活用して、相手との円滑な関わり方の習得をねらいとする授業であった。生徒同士の日頃の良好な関係性や担任の嶋教諭との信頼関係が感じられた。

協議会では、間違い探しをコミュニケーションの材料にしたことや、ルール等を伝えるための教師の実演が取り組みやすさにつながっていたということ、今まで関わった教師からの生徒たちへのコメントがやる気や自己肯定感を高めていたということが挙げられた。一方、他のグループがゲームに取り組む様子を見てみるなど、自分たちのことを客観視する時間があればもっとよかったという意見もあった。

佐々木暁指導主事（西部教育事務所）からは、以下の助言をいただいた。

・授業の振り返りでは、「これからも人前で話せると思う」と語った生徒に、教師が「先生もそう思う。自信をもって」と笑顔で励ます場面があり、温かな関係を感じることができた。
・生徒の実態に応じた題材や相手を意識して話を聞くルール等、学びを実生活に活用できるよう工夫されていた。また、生徒の実態に応じて、相手を意識して話を聞くルール等、実生活でも使える学習が設定されていた。
・ICTの活用率が低いとされる特別支援学級の授業で、簡単に使えるパワーポイントを使うことで、研究主題との関連付けがなされていた。
・自分の課題や生活を振り返り、まとめを発表することで、自分の言葉で相手に伝え、仲間や担任以外の先生にも認めてもらうことができ、前向きな取組へとつながっていた。
・ソーシャルスキルトレーニングを通して、生徒同士が自分の言葉で考えや気持ちを相手に伝えられるようにしていた。「協力間違い探しゲーム」では、生徒が質問し合う状況をつくることで、互いに努力を認め合える関係が築かれていた。
・自立活動を学ぶ意義を教師と生徒が共有し、培った力を家庭や、地域社会で活用していくことが重要である。
・自己評価を正しく行うためには、他者評価を取り上げることが大切であり、他者からの評価を受けることで自己評価の精度も上がっていく。

続いて行われた授業力向上アドバイザーによる授業力向上のための講義では、富山大学教育学部教授であり、富山大学附属病院の小児科医でもある宮一志先生から「将来を見据えた特別支援教育」というテーマでご講演をいただいた。近年、特別な支援を必要とする生徒の割合が増加傾向にあることをふまえ、小学校や高等学校とも連携しながら、将来を見据えた切れ目のない支援の必要性を知ることができる貴重な機会となった。

川端佐和子（氷・北部中）

将来を見据えた特別支援教育
（第69回西部地区大会での講演概要）

富山大学教育学部　教授　宮　　一志

1　将来を見据えた特別支援教育とは

教師は、対象となる生徒たちが成人したとき、さらに、親が亡くなったときの生活を予測して関わる必要がある。学校では、生徒にとって今すぐに身に付けることが困難な力を、身に付けさせようとする場面が散見される。その場合、本人も、教える方も辛くなる。生徒が大人になったときに身に付いていればよいという考えで関わるとよい。そのためには、本人が最終的にどうなっていくかをある程度予測した上で、今の生徒の現状に応じた支援を考えていくことが大切である。

しかし、中学校だけで生徒の様子を見ていても、将来を予測することは難しい。例えば、小学生のときの様子を少しでも把握していれば、中学校での成長の様子が分かり、今後の見通しをもつことができる。さらに、卒業後の様子を知れば、様々な特性をもっている生徒が将来どのように成長していくか、少しでも正確に見通しがもてるようになる。小・中・高の先生が連携する場があるとよい。

2　知的障害・発達障害とは

知的障害、発達障害は、脳の機能の障害である。二十歳くらいまでは脳の基本的な機能は向上し、個人差はあるものの、同年齢であれば同じくらいの機能をもつ。これが同年齢の子供たちと同じように発達しないと、知的障害、発達障害ということになる。 年齢に対して、全体的に脳の機能が未発達なのが知的障害の特徴で、年齢よりも幼いイメージになる。自閉スペクトラム症の子供は、脳の機能によって発達している部分としていない部分がある。個々によって、特徴が異なり、変わっている、独特といった印象になる。皆と物事の捉え方が違うため、コミュニケーションの食い違いが起きやすい。

3　将来を見据えた支援のために

特別支援教育では、生きる力を育むことを目指しており、自立活動は大切な活動である。将来、生徒が自分の力で生活していくことイメージするとよい。例えば、就労する際に必要な力を知っておくと、自立活動を計画する上で、役に立つ。

一方、障害の程度によっては、一人で生活することや収入を得ることが難しい。一人で生活することが困難な場合は、障害福祉サービスを受けるという選択肢がある。教師が、障害福祉サービスの種類等を知っておくことは、生徒の将来を考える上で役に立つ。また、生徒が将来どのようなサービスを受けるか予測できれば、無理な指導をしなくてもすむ。

最終的には、親の援助を受けずに、自分の力で生きていくことができるか、親が亡くなったときに、家族以外の人のサポートを受けて生活できるかが重要だと考える。そのためには、家族以外の人と、関われるようになる必要がある。学校等に来て、継続的に家族以外の誰かと関わる状況だけは維持してほしい。

矢野　優子（高・高陵中）